

観測気流

■西部 忠

ニューヨークで始まった「反ウォール街」デモが欧州やアジアにも広がってきた。参加者の主張や階層はバラバラで、政治勢力としてのまとまりはない。彼らは何に憤り、何を望んでいるのか。

深刻な不平等の拡大が背景にあることは間違いない。1979年から2007年までの間に、米国の高額所得者上位1%が全国民の所得に占める割合は8%から17%へ倍増した。ただ、デモ参加者の要求は経済格差の是正だけなのだろうか。

マイケル・ムーア監督のドキュメンタリー映画「キャピタリズム（資本主義）」マネーは踊る」（09年）にヒントがある。映画はバブル崩壊で住宅ローンを払えず家から強制退去させられる庶民と、公的資金で救済されても高額な役員報酬を払い続ける投資銀行や保険会社を対照的に映し出す。ラストでは監督が「犯罪発生中」と書いた黄色い捜

深刻化する不公正の拡大

査線用テープでウォール街を囲う。このパフォーマンズこそ「ウォール街を占拠せよ」と叫ぶ今回のデモの原型だ。

グローバル資本主義は過去30年で規制緩和・自由化へ大きく転換した。その結果、金融危機が慢性的に発生し、その度に国が大企業を救済し、今度は欧州連合（EU）がギリシャを救済する。自己責任原則の破綻を、「金融システム維持」の大義名分を掲げる国家・連合の介入で取り繕っているのが実情だ。

容易に救済される大企業・国家と、決して救済されない個人。貧困層や中間層はこうした不公正に不満を抱き、資本主義というゲームに疑問を持ち始めた。米国の富裕層が自らへの増税を支持し始めたのも、富者をますます富者にする不公正が露骨な今のシステムに、崩壊の不安を感じたからではないか。

（北大大学院経済学研究所教授）